

哲學と生活

勝部謙造

一

哲學の從來進んで來た途は、あまりに智的、概念的に傾き過ぎて居るといふ感起すものは、恐らくベルグソン一人ではあるまい。哲學の目的が概念的、思惟其者にあらざるならば、それでも宜しからうが、苟くも實在の深底に探究の錘を垂れようといふのならば、今少し生活其者に立脚する必要があるまいか。勿論、生活といふやうな語は多少曖昧な、多義的な、又或る意味に於ては都合のよい、概念であるとも云へやう。リッケルト等の明快な論理の前には、この様なピオロギッシュな臭氣を脱せない概念の上に築かれた凡ての思想は、一たまりもなく崩れてしまふやうにも思はれる。然しながら、又一方から考へて見るに、このリッケルトの明快な論理其者にどこか無理がありはすまいか。實在界の凡てが果して論理の力だけで、よく純粹に知的に解けて行

く者であらうか。現實在の不合理である事は彼自身も認めて居る。然し彼は此不合理なる現實在を改造して、全然合理的のものにする重い任務を、我々の認識作用に負はして居る。我々は彼が極力排斥して居る模寫説と、彼のこの改造説とが根柢に於て、ただだけ相違して居るのか大に疑問にして居る。それは兎も角として、彼がかく重大な任務を負はして居る認識作用は何によつて行はれるか。それは判断によつて行はれる。判断とは何か。リッケルトの立場から云ふと、判断は超越的不許不を認容又は拒否する事によつて生ずる。認識の對象は此判断に依つて認容又は拒否されるものがそれである。さらば此認容とか拒否とかは如何なる事を云ふのか。認容又は拒否といふのは勿論的、論理的の概念ではない。其根據は、どうしても我々の情意になければならぬ。彼一派の哲學に於てかくの如き重大な任務を課せられて居る情意なるものは、彼等の學説に於ては、少しも表面に出て居ないか、又ごく稀にしか現れて居ない。少くともこの方面の精神活動は、思惟の働の背後にひそめる一種の影武者として扱はれて居る觀がある。かくの如くにして、實在界の不合理な、曖昧な部面は、云はゞ捨て、顧みないのだから、此の一派の説く處が明快で解り易いのは當然である。然し此明快には非常な高價な犠牲が拂つてある。明快であるだ

けそれだけ具體的實在を離れて、或る立場からの抽象の一面しか捕えて居ないと云ふ事も容易に推測出来るのである。

或は又かの論理の緻密精細を以て鳴れるマールブルヒ派に就いても同様である。彼等の論理的、方法的、概念的觀念論の立場よりすれば、純粹思惟活動を離れて生活と云ふものがある筈がない。與へられたものは課せられたものである。凡てが思惟過程の大きな臼の中で挽き碎かれてしまふ。否寧ろ逆に、思惟活動は凡てを自分の中から挽き出すのである。この様な立場から云へば、生活とはつまり思惟活動の事であつて、我々がこゝで此語の下に理解して居る様な、思惟も何もかも包んでしまふ様な廣い意味の生活と云ふ事はない事になる。笑ふべき矛盾となつてしまふであらう。然しながら此の笑ふべき矛盾に却つて尊き眞理があるのであるまいか。マールブルヒ派の云ふやうな凡てを産み出す思惟が存在して居ることを、思惟自身によつて如何様に基礎附ける事が出来るか。結局は世界をロゴスの活動と見る汎論理的形而上學になりはすまいか。純粹思惟のみによつて、論理的に可能なるものが如何にして現實となるか。可能的が實在的となるには單なる思惟活動以外に何者かこれに加はらねばなるまい。そこに思惟でない非論理的な異分子が豫想されて居

るのではあるまいか。この様に知的、論理的な方面に偏した在來の哲學は、勿論人によつてそれ／＼の違はあるが、我々から見ると皆一様に豊富なる實在界の或一部分だけ取り除いて來て示したものに過ぎぬ。明晰判明を重んずるの極、知的、論理的の一方に偏し、情意といふ大切な要素を没却し、生活其者に立脚することを忘れたものである。

一一

哲學だけではない、凡て科學の取り來つた態度は矢張り純粹知的のものである。自然科學の我々に示して呉れる世界は、全く改造せられた實在である。機械化せられた世界である。物理學の目的は擬人主義よりの解放にありとプランクが云ふて居るのは、自然科學の進むべき一路を最も明らかに指示して居る。人類の生活が初まつて以來、文化活動としての科學は、此機械化の長い長い發展の歴史を経て、今日の様になつて居るのである。科學上の根本概念といふものは、皆我々の生活に於て直接に興へられたものを捕えて、論理の平面上に排列固定せしめる手段である。原子とか物質とか力とかエネルギーとかいふ概念は、畢竟皆此目的に對する一手段に過

ぎぬ。實在を關係の體系即ち所謂關聯の網で包んで行かうといふ努力の一端である。原子とか云ふ概念其者が、此大きな網の一枝體である。實際自然科學は我々の生活の背後に新實在界を見出すのではなくして、寧ろ我々の生活にあらはれて居る色々な關係を、普遍妥當的な知的な圖形に展開して行くものである。つまり萬有から魂を抜き去つて凡てを死物と考へ、其相互の關係を最もよくあらはすと信せられるそれらの符號が即ち科學を成立させる根本概念である。自然科學の世界はフェヒテルの所謂 *die Nachansicht der Natur* である。我々は此外にまだ *die Tagesnsicht der Natur* のあることを決して忘れてはならぬ。

此點に於て我々は、*デイルタイ* や *フリッシュユアイゼンケラー* の所謂「行の立場」(*Standpunkt des handelnden Menschen*) といふのに一層の共鳴を感じるものである。元來自然科學それ自體も文化的創造物である以上、死物の數學的論理的法則體系と見らるべきものではない。我々は一體學問に就いて餘りに出來上つた結果だけを重視して、眞理探究の過程其者を注意しない病弊に陥つて居る。科學は單に瞑想的、受動的に驚嘆したり、凝視したりするだけの能ではない。科學についてこゝにいふ偏見をいなく様になつた責任の一半は希臘人が負ふべきものである。彼等の特有な審美的瞑想的

な性情が其科學觀をして一方に偏せしめ、延いて長く後世に禍を殘して居る。然し現實の科學に於ては、この様な探究によつて出來上つた結果、即ち學說、理論といふ方面の外に、他に今一つ頗る重要な方面がある。即ち理論の方面ではなくして、作用の方面がこれである。積極的に進んで眞理を探究する生ける活動、行、作用、創造の方面である。學說理論の方面に對して、探究又は應用といふ生活上の一つの力としての方面がある事を忘れてはならぬ。前者は云はゞ平面的に、單に思惟だけの體系、もしくは關聯としてあらはれた方面である。後者の立場から科學を見る時は、理論だけではなくして、其理論を我々の實際的態度に於て、探究したり又生活に及ぼして利用したりする方面をも悉く網羅する一大體系、即ち所謂作用關聯 *Wirkungszusammenhang* である。即ちこの作用關聯としての科學は、單に思惟にあらはれる理論的の體系のみでなく、我々の情意的、行的の方面をも悉く其内に含んで居る。云はゞ立體的の關聯である。人間の精神が全體として働く場合のあらゆる關係や體系を綜合統一する一大組織である。これはかの偏知的態度の人々が考へて居る様な、無聲無色の眞理の世界を分析することでもなければ、又黙々として自己自身を發展して行くロゴスの活動、自己自身を實現して行く價值といふやうなものを傍觀的態度で眺めるこ

どではない。進んで挺や螺旋でもつて自然から其秘密を絞り出し、吐き出さしめると云ふ態度である。自然の合法性を認識することによつて、だん／＼に自然を征服して行くといふ態度である。これは何も新しい事實ではない。自然科学の長い發達の歴史がこの事實を充分に裏書きして居る。而してこの積極的探究の態度の意味は、かの「實驗」といふ特別の仕事に最もよくあらはれて居る。もし我々が積極的に進んで手や足や頭やを動かし、色々の新しい感覺を得る事がなかつたならば、我々の經驗の總和といふものは頗る貧弱なものでなければならぬ。又いつまでたつても學術の進歩といふやうな事は無いわけである。それを人工的に色々都合よくし、且つ同種の經體を幾度も繰り返し得る様な設備をして呉れる處に、實驗の科學探究に於ける價值といふものがある。原始人に取つては到底手の届かなかつた天上の星といふやうなものも、今日では科學の力によつて計畫的組織的に實驗的の取扱を受ける事が出来る。望遠鏡だとか、分光鏡だとか、其他の實驗機械によつて天體から出て来る光線を捕え、科學的分析の材料にする。或は又我々は學術研究のために、どこにでも旅行をして未だ知らぬ國や人に接する。動物や植物や、甚だしきは人體までも、内部の構造を明にするために切斷解剖をする。これはひとり自然研究に於て

のみではない。歴史學に於てもやはり、過去の生活や文化を再び白日の下に持ち來すために、或は古文書を詮索して研究を試みたり、或は地中深く鍬を入れて古世紀の遺物を發掘したりする。要するに科學も哲學もこの見地から見れば、全く一の作用關聯であつて、單なる思想の開展ではない。生ける文化の働であつて、其根柢は知的思惟活動だけにあるのではなくて、我々の情意の世界實行の天地にあるものである。かのデイルタイが、ロックやヒュームやカントの立場に満足出來なかつたのも無理のない話である。何となれば、*In dem Adern des erkennenden Subjects, das Locke, Hume und Kant konstruiren, findet nicht wirkliches Blut, sondern der verdimnate Saft von Vernunft als blosser Denkthatigkeit* ”であるからである。

III

上來、我々の述べ來つた事は、まことにありふれた事で何等の新奇も其中に見出す事が出來ぬ。リッケルトの所謂「胡桃の逸話」の様に、誰人も未だ窺つた事のない珍らしいものといふ小名題の下に、ごく有りふれた胡桃の殻を割つて中の核を取り出して見する様なものかも知れぬ。然し元來哲學といふやうなものに、さう新奇な事があ

り得るものではない。生活は哲學のアルファであり同時に又其オメガでなければならぬ。示されたるものが有りふれた胡桃の核であつたればこそ、そこに無限の味がある。我々の生活と全然没交渉な、全然新奇なものであれば、我々には用はない。又事實さういふものはあり得ないのである。がそれは兎に角として哲學に於て我々がデルタイ一派のやうに、思惟の立場から情意の立場に、反省の立場から行の立場に移つて見ると、そこに從來結ばれて解けなかつた色々な問題が、自然に都合よく解決せられる事を見出すものである。第一に解決の鍵を得るものは、所謂實在性の問題である。觀念論者から云へば實在性といふやうな事は全く問題にならないであらう。然しながらいかに純粹論理の體系でも、まさか空中に浮動して居るわけでもない。ごここかで實在界に立脚して居るのは明である。殊に彼等が分析の出發點として居る特殊科學に於ては、既に充分この實在性といふものが豫想されて居る。科學的認識を表はす判斷は、決して單なる思惟可能性のみを目的としては居ない。沙翁がシーザーを寫し、シルレルがウァレンシュタインを描く場合には、これ等のシーザーとかウァレンシュタインとか、歴史的に實際にどんな人物であつたかといふことは大して重大な問題ではない。詩人は自分の創作の天地を縱横に闊歩する自由を持

つて居る。然しながらモムゼンが歴史的のシーザーを紹介したり、ランケがウァレンシュタインの風格を我々に描いて見るといふ時には、それとは事情が全く違ふ。此場合は史家其人の放膽なる空思をば許さない。其描寫や記述には、どこまでも史實に忠ならん事が期待されて居る。

哲學に於て此實在性なるものを純理論的に取扱つて、これに基礎附けをする事は最も困難な様である。スコラ哲學以來の神の本體論的證明例へばライブニツの最も完全なるものは存在すといふ考にあらはれた實在性の取扱方には、勿論見方によりては深き眞理も藏せられてゐるであらうが、先づ普通の解釋法に従へばこの種の存在と實際の存在との間には、カントも云ふて居る様に、頭の中で考へた百ターレルと懷に實正にしまつて居る百ターレルの現金との間ほどの間隔がある。實在性は我々の科學の出發點であるだけに、或る點から云へば我々に最もよく知られたものである。然し又これと同時に、これには常に事實性とか、又は經驗内容とかいふものが結びついて居るので、その點から云ふと最も不明な、不合理的のものである。此故にこの問題を單に受動的、反省的の立場からして論理上から明にしやうといふのは、元來が無理な注文であると我々は斷言したい。實在性は知的に認識せられるもの

ではない。知的であり且つ情意的なる全精神力の發動たる行的態度に於て體驗せられるものである。

四

意志的、行的態度に於て、我々は進んで自己の欲するものを取らうとする努力の體驗と同時に、矢張り同じく根本的なる、ある一つの體驗をするものである。それはその突き進んで行かうとする努力が、阻止、抑制せらるゝといふ體驗であつて、この體驗の尖端はいつも感覺にあらはれる外物と云ふ形を取るものである。原始時代の素朴的な意識では、此阻止、抑制の働は「宿命」の盲目的な發動であると解せられて居る。この阻止、抵抗の體驗は、努力の衝動が働いた後に起る反省的の意識ではない。同時に起つて來る現象であつて、衝動と阻止とは云はゞ一物の兩面のやうなものである。然しながら意志發動の側から云ふと、この阻止、抑制といふ事は、内在的には説明の出來ぬ。外部的のものである。こゝに意志活動の限界があるのである。而して此限界はいつも感覺、即ち我々の意識内容と結びついて居る。そこで我々の意志の働を阻止するといふ特有の經驗を伴なうところの意識内容が、即ち我々に取つて實

在的實存せるものである。恐らく實在性の眞の基礎はこゝにあるであらう。かくの如くにして我々は、何も此問題を解決するために超越世界を認める必要はなくなる。只我々の意志に對立して作用するものを認むれば、それでよろしいのである。實在性の問題はかくの如くに、知的論理的にでなく、意志的、行的に其基礎が明にせられて解決の途がつくのである。

意志發動の凡ての作用は、目的實現の過程である。ある目的實現を制約、阻止するものは、一口に云へば所謂物質世界である。外界實在である。勿論此外界世界を立てるといふ事に就いては様々の異議があるであらう。然かもそれ等の異議の多くは、思惟にのみ訴へる純粹論理的の異議であるといふ事を忘れてはならぬ。我々がこゝに外界實在を認めるのは、論理的根據によつて然かするものではない。意志行動の世界に於て、體驗の基礎の上に、これが實在を主張しやうと云ふのである。意志活動の體驗に、外界實在の認識の基礎を求むるといふ事は、前者からして因果律によりて後者を推論すると云ふ事ではない。因果律によつて推論するといふやうな事は、純知的態度に於て行はれる事であつて、こゝに我々が述べて居るやうなものは場合が違ふ。勿論我々の體驗自體には、我々の行的自我に外から働く原因といふやう

なものゝ意識はふくまれて居ない。我々は只實行的自我が働く處には、いつでも自我の行動に對する阻止、制約といふものを、自我の限界として感ずるものである。あまり適當な比喩ではないかも知れぬが、我々は丁度硝子の器物に入れられて居る金魚のやうなものである。金魚は自分の世界には、硝子器の壁といふ限界があることに氣がつかずに、始終自分の鼻をついて居る様に、我々の意志活動が、次から次へと流れて行くに應じて、それ〴〵に阻止、制我を體驗し、そこに我々は主觀の限界を認め、客觀の存在を意志的、行的に承認するものである。繰り返して述べておくが、この主觀と客觀との關係は決して論理的のものではない。

五

かくの如く、外界實在に關する我々の信念の基礎は、これを意志的、行的態度に求めねばならぬ。これによつて所謂實在性の問題は解決出來たのであるが、次に當然起つて來なければならぬのは、「他人」の存在といふ問題である。我々は單に外界世界とか、外界實在とか云ふて居るが、此外界實在といふ内には、自然科學の對象なる、それ自身には生命がないと考へられる物質も入れば、又我々と同じ様な生命があり、我々と

同じ様な意識活動を營んで居る「他人」といふものも、我々の自我と對立するものとして、當然この外界實在の内に入るべきものである。今我々は此兩種の實在を如何にして區別すべきであらうか。否、單に物質的なる外界世界を認識する方法では、この「他人」と雖我々の主觀を離れて居る以上は、我々と同じく意識を有する存在物であるといふ事を認めるのは頗る困難である。もしかゝる問題が、純粹論理的に取扱はれねばならぬものとすれば、其解決は不可能である。何となれば知的認識の過程から云へば、人間と雖我々自身でない限りは、矢張り物質と同じく感覺として我々の經驗に現はれて來る。今、色とか形とか音とか香とかいふ風な單なる感覺として我々にあらはれ來る一群の經驗からして、この感覺の背後には我々と同じ様な内面性を有し、自律的意志活動によつて、自ら行動して居る存在者があるといふ事を、如何にして我々は知る事が出来るか。事實に於ては我々はこれを知つて、自分と同類の人間として交際し生活を營むで居るのであるが、それは果して理論的認識によつて基礎附けられ得る事であらうか。理論的に云へばリップス等も云うて居る様に、我々は今自分の前に居る人間が、ある表情をし、ある音聲を發したからとて、必らずしも其人に、我々に傳ふべき一定の理想があり、一定の氣持があるとは限らぬ。これだけの材料に

よつて、これだけの推定や解釋やをするには、其理論的根據としては類推法といふもの以上にたしかなものを持つて居らぬ。論理的に考へて此類推法なるものがどんな價値を有するかは誰でも知つて居る通りである。さうすると、我々の文化活動の一般的の舞臺となり、殆どあらゆる精神科學の對象界を形づくつて居る處の Ich と Du との關係就中 Ich は如何にして Du を認むるかといふ根本的問題が、知的態度からしては、まるで解決出來ないといふ事になる。こゝに於てか我々は進んで、我々の所謂行的の立場より、此問題が如何に解せらるゝかを見ねばならぬ。

意志發動の作用は目的實現の過程である。然るに、ある目的實現の作用を阻止、制約するものは、他の目的實現作用にして初めてよくこれをなし得るものである。言を換えて云へば、意志の働を阻止するものは、意志でなければならぬ。我々は先に常識の見に従つて、外界實在を物質界及他の人間といふ二部類に大別をしたのであるが、かゝる事は嚴密なる意味に於ては許さるべきでない。物質とは元來、自發科學の機械化によつて生じた空虚な概念である。意志的行者としての我々の、眞に深い體驗にあらはれて來るものは、その様な具體的實在に遠かつた、空疎な記號的概念ではない。知的概念的、思惟的の理解は、外面的、皮層的の接觸である。我々は既に、意志を

制約するものは、どこまでも他の意志でなければならぬ事を見た。さすれば意志者としての我々の深い體驗にあらはれるものは、一般的概念的の知識ではなくして、他者の意志でなければならぬ。即ちこゝに於ては、意志は直接に意志に觸れるのである。所謂 *Deep calleth unto Deep* の境地でなければならぬ。これはミュンスターベルヒのやうな心理學者すら認めて居る事實である。而してこゝに初めて我々は、他人の存在や、他人の思想感情を認め又解釋するの鍵が得られたのである。

在來の哲學者の内にも随分、我々の生活に於て情意の勤むる大切な役割に留意して、我々の意志的經驗を以て外界實在説の基礎を説明しやうと試みた人も可成りある。然かも彼等が皆説いて完からず、其企圖が空しく失敗に終つたのは、彼等が悉く、ロックからメーニエドッピランに至るまで、意志其者の解釋を誤まつて居たからである。彼等は直接に自分自身に於て生きて働いて居る意志其者を見ないで、却て説明心理學や精神物理學の教ふる處に従つて、意志を解した。意志をば精神物理的個體の營む一過程であるとして解した。此精神物理的個體といふ概念の下には、既に々々外界實在といふものが明に許されてあるが故に、かゝる概念に基礎を置ける彼等の解決が、遂に正鵠を得る能はざりしは勢の止むべからざる處である。然るに我々が今こゝ

に述べて居る様な形に於て、意志が直接に意志を制約することによつて觸れ合ひ、そこに二つの主觀が各々自分の限界を見出すのであると解することによつて、初めて Ich や Jiu との關係を説明し、否體驗することが出来るものである。全體我々の文化、殊に複雑なる社會生活の諸相、又道徳とか宗教とかいふ深い問題になると、所謂明快なる論理を以て到底分析解剖して行く事の出来ぬ不明な核心がいつまでも残り存して居るものである。かくの如きは矢張り、感情は感情を喚び、意志は意志と觸れ合ふといふ境地に入つて見なければ、決して會得の出来ない事柄である。

六

我々はかく、意志的行動によつて他人者の認識を營むものであるが、然らば問題は再びもとに還り、この他人者を認識する場合と、我々が普通常識によりて精神を有せざる死物と解して居る物體を認識する場合は如何様な相違があるか。我々は此問題に對しては否定的の解答を與へねばならぬ。何となればこゝに問題になつて居る二つの者には、我々の根源的體驗に於ては、何等根本的の區別を認むる事が出来ぬからである。何となれば前にも述べたやうに、物質とか原子とかいふ概念は、具體

的實在に遠かつた抽象的記號である。具體的實在は、我々が意志的態度に於て體驗する阻止、制約を伴ふ「他者」の世界である。これ等の他者は悉く我々自身の意志を制約し、我々の主觀の限界を形づくる他の意志である。凡てが自分と對立して居る他の行的意志である。日常生活に於て我々がさういふ風に解釋せないのは、數學的、自然科學の啓蒙が長い年月の間に、殆どありとあらゆる外界對象をば擬人主義から解放する事によつて機械化し去つてしまつたからである。自然科學的、純論理的機械化の働が手をつけて居ないのは、只一つ所謂「他人者」の世界が残つて居るだけである。これさへも近時漸く心理學や社會學に於て自然科學的方法によつて、だん／＼に機械化、數量化されつゝある傾がある。實際、自然科學の機械觀は我々に取つて頗る簡易であり、又便利である。殊に幾千年の長き機械化の歴史によりて習慣的となれる我々の考方には、甚だ都合がよいのである。然しそれだけ一面的、皮層的であつて、ベルグソンの所謂「出來合の着物」たるを脱れないのも明かな事である。

原始時代の自然人は、我々が今日自然科學の教ふる處に従つて、生命なきアトムの群、又はエテルギーの集團と考へて居る物質界をば、我々人間と同じく魂を有する世界であると解して居たものである。いつの時代如何なる民族にあつても、原始的の

意識には、彼等の豊富な詩的想像力と共働して、此擬人化的、物活論的の態度が必ず伴うて居るものである。各國各民族の言語の形式が明にこれを證して居る。この様にいつの時代、いづれの國にも認められる普遍的の現象をば、只單に幻想とか、暗示とかいふ貧弱な概念によつて、説明し去られるものであらうか。原始人のこの擬人化的の態度は、外界實在に對する我々の根源的體驗を最も能辯に語つて居るものではなからうか。かの小兒が誤つて器物にて身體を打つた時、彼は其器物が故意に自己を傷けたものとして、進んで其物に對して復讐的攻撃的の態度を取るものである。我々の意志的、行的體驗の範疇は、實にこの種の根源的の事實にあらはれて居る我々の態度が即ちそれである。然るに我々は生活其者の必要上からして、此行的態度の簡易化、平明化を絶えず行ひ、漸次、この體驗の範疇に代ふるに對象的思惟の範疇を以てし、自然科学的見方が普く人心を支配するに至り、終には我々をして本末を忘れしめる様な事になるのは、實に人類文化の一大イロニーであり、又悲劇である。

實際我々に、抑へても抑へても抑へ切れぬ形而上學的、宗教的の要求があるのは何故か。實在の「夜の相」に満足せず、「晝の相」を憧憬して止まざるは何のためか。機械化、法則化の方法では此要求は解けない。何故にかゝる要求が起るかの説明だも出來

ぬ。凡ての宗教、凡ての信神の根源は、實に我々のこの實在認識の根本的體驗たる、神話的統化作用にあるのである。世界から目的や精神を抜き去り、實在を數學的自然科學的記號の連續關聯のみであると見たり、萬有は魂なきアトムの盲目的活動に過ぎずと見るの孤獨には、人類は到底堪え忍ぶ事が出来ぬ。この孤獨を脱せんが爲に我々は、目的實現の大意志者として神を自己と對立せしめ、一度全く失うたものをこれによつて恢復しやうとするのである。傳へ聞くピタゴラスは深夜人靜りて世界の雜音が消え去つた時に、天上の星群が奏づる微妙な旋律を耳にする事が出来た。我々はこれを彼の數論と共に、古代人の迷妄として一笑に附し去るべきであらうか。物活説とか、デモンの説とかは、精細緻密の論理よりも一層 *sublime* な處があるのは何によるか。もし神を信じたり、物活論的に世界を視たりする事が一種の假説にすぎないと云ふならば、知的論理的に偏せる科學や哲學の體系も、上來我々が指摘し來つた様に、矢張り一種の假定ではないか。勿論、純粹思惟の立場を全然退け去ると云ふ事は、我々の茲で目的にして居る事ではない。意志的、行的態度に於ける根源的な體驗も、進んでこれを我々の觀念や記憶に於て保持確留しやうとすれば、我々は直ちに反省の立場に移り、觀念や思惟の世界に這入るのである。生ける體驗が自己自身

の衝動によりてこゝに固定凝結するやうになるのは、ベルグソンも云うて居る通りである。これは實に我々の避け難き運命である。又決して呪ふべき運命ではなくて、寧ろ尊重すべき生活の一便益である。我々は只絶えず清新なる生活體驗によつて、我々の思索反省の途が新にせられ、哲學本來の目的、目標を失ふ事なき様注意する事が最も大切である。何となれば我々は繰り返し云ふ、生活は哲學の出發點であり、同時に又其最後の目標である。

參考書

Frischsen-Köhler : Das Realitätsproblem.

Frischsen-Köhler : Wissenschaft und Wirklichkeit.

Dilthey : Einleitung in die Geisteswissenschaften.

Rechner : Die Tagesansicht gegenüber der Nachansicht.

Rickert : Die Philosophie des Lebens

Lipps : Die ethischen Grundfragen.

Minsterberg : Philosophie der Werte.